

加藤辨三郎 述

歎異抄

16

文責 本誌編集部



佛さまの御弟子

一 専修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人もたずさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに弥陀の御もよほしにあづかて念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あれば、はなる、ことのあるをも、師をそ

むきて、ひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへすぐもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと、云々。

以上、『歎異抄』第六章でございます。まず、ここに書かれている「専修念佛のともがら」は、

もうすまでもなく、本願を信じ念佛を称えている人たちです。しかし、本願といい、お念佛といい、それは如来から賜ったものであります。それにもかかわらず、わがもの顔で、私は師匠だ、お前は弟子だというのは、もつてのほかである。いわんやある人が、自分のところから去って、他の人のところへ行つたとすると、それはけしからぬ、そんなことでは往生極楽はできない、という人がいます。これは言語道断であるといった趣旨でございます。

実際に、こういうことがあつたのでしよう。それが『御伝鈔』あるいは『改邪鈔』に載っています。

親鸞聖人のご在世中、二十四輩ともうし、主だったお弟子さんが、二十人余りいられたのです。今日、二十四輩とは二十四人という意味にとられています。原文には二十人余りと書かれております。とにかく親鸞聖人の高弟に当るわけです。しかし親鸞聖人ご自身は、自分は師匠だという意識は、全くお持ちになっていません。自分はただ師匠の法然上人から聞いたことを伝えているだけです。そしてそのもとをいえば、釈尊の教え、つまり『大無量寿経』に説かれていることを、自分は習ってお伝えしているのです。いうなれば、そのメッセンジャー・ボーイで、諸君の師匠

ではありません。このように親鸞聖人のご信心は、徹底したものであります。

ところが、二十四人のなかとははつきりわかりませんが、いつの間にかグループができ、グループのリーダーは、自分が師匠、教える側で、そこに集まつた人は、弟子だと思ふ方がいたのでないでしょうか。親鸞聖人ご自身は、法然上人を本師と仰いでおられます。教えを受けた側から見れば、自分を教えてくださった方は、とうぜん恩師で、自分は弟子だと思ひます。またそれは自然です。けれども、親鸞は弟子一人も持たないというふうなお考えからいえば、師匠の側から、お前は私の弟子だというふうなことは、もつてのほかであるということです。この親鸞は弟子一人も持たない、私には弟子はいない、何かを教えたというのなら、それは弟子といえるが、私が何を教えたというのか。みな本願を信じ、念佛もうす仲間、みな等しく如来のみ子である。したがってわれらはみな佛さまの御弟子ではないか。自分が念佛をもうすのも、本願を信ずるのも、自分が信じたとか、自分が念佛を称えたとかではない、これはみな釈迦牟尼佛と阿弥陀如来の御二方の大慈悲心によつて、自然に称えさせていただいているのだと。このように親鸞聖人

はおおせられています。たいへん徹底した教えです。

二尊の御もおし

多くの人は、自分が信じて、自分が念佛もうしていると思つています。それはちよつと考えると当り前のようですが、よくよく考えると、そうではありません。これはお釈迦さまのご恩、阿弥陀如来のご恩であるのです。『大無量寿経』のなかに、本願が四十八か条書かれています。これは釈尊が、阿難尊者を初めとして直接のお弟子方にお説きになっていられるのです。ですから、釈尊が『大無量寿経』を、もしもお説きにならなかつたら、私たちが本願を信じ念佛もうすことは、あり得ないのです。しかし、釈迦牟尼佛がお説きになったおかげで、信心をいただいたのです。ゆえに釈尊のご恩はたいへんに重いのです。

そこで『大無量寿経』の中身を考えさせていただく、そこには阿弥陀如来が、わざわざ法蔵菩薩の姿をとつて、凡夫のために本願を四十八か条書き、これを諸君は信じなさい、そうすれば諸君は、私と同じようにさとりの世界へ入ることができるのだとおおせになりました。そして法蔵菩薩が本願を成就なされて阿弥陀佛にお成りになりました。釈尊は、こういうふうには『大無量寿経』をお説きにな

られました。その釈尊は、心のなかで阿弥陀如来を拜んでいらつしやつたのでしよう。これはすなわち釈尊のおさとりの内容なのです。

それを、なるほどそうでございますかと信じさせていただいて、南無阿弥陀佛と称えています。普通われわれの頭で理屈を考えていては、自分が先に立つて、南無阿弥陀佛を称える境地はなかなか出てきません。出るのは本当に本願を信じ念佛をもうすようになった人です。その人が、初めて翻つて、そうかそうか自分のような驕慢な、頑固一徹な者がこうして南無阿弥陀佛と称えるようになりました、と。これは阿弥陀如来の御もおしであります。また、釈迦牟尼佛の御慈悲による御もおしでありました。二尊の御もおしがなくては、私は南無阿弥陀佛と称えるわけがありません。阿弥陀如来と釈迦牟尼佛の二尊の智慧と慈悲で、初めて信心を得させていただいたのです。

いずれも諸君を信じさせたのは、この親鸞ではない、もし私が諸君を教えて信じさせたのだと思つたのであれば、それは如来の御働きを、私の働きにすりかえることになつて、たいへんな驕慢の至りで、それでは如来に対して、まことにもうしわけない、このように親鸞聖人はおおせになつ

ています。それが、必ずしも自分が先に立つということではなくても、自分のなかにある法は非常にすぐれた法だった、いわゆる法執に陥る、法に執われて、いつの間にか自分も偉い者になった気分になってしまします。そしてあなた方は、ほかのほうでうろろうしていて、一向にわかっているのではないと、もう天狗になり、自然に指導者顔になってしまうのです。これはじつに恐ろしいことです。

我が先立つ

これについて、親鸞聖人は、ご和讃を二首詠んでいられます。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな

まことのころなりけるを

善悪の字しりがほは

おほそらごとのかたちなり

何が善であるか、何が悪であるか、その文字も知らない。善という字も知らない、悪という字も知らない。だが、そういう人たちは、ひとえに本願を信じ念佛もうすというまことの心をみな持っていられる。しかるに一方、善という字も知っている、悪という字も知っている、善というのはいかような意味だ、悪というのはいかような意味だなど、物知

り顔にいうのは、大たわけだといわれています。これは必ずしもお弟子に向かってばかりいっているのではなく、親鸞聖人ご自身の深いご反省でもありましよう。ゆえに『歎異抄』の終りのほうには、「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり」と、はっきりおっしゃっています。それは、親鸞聖人ご自身も、お若いとき、ある時期までの間には、やはり、わかったというお気持ちをもたれたのでしょうか。

それで、自分自身に対する痛烈なご反省があったのでしよう。それとともに、弟子たちにも、何が善か、何が悪かをご承知になるのは如来さまだけであって、われわれは何か善か、何が悪かは、わからない、とにかくわかった顔をする者こそ、たわけで、何も知りません、ありがとうございませうと、念佛を称えている人こそ、まことの信者です、とおおせになつていっています。

もう一つの和讃をもうしあげましよう。これも親鸞聖人ご自身の非常に深いご反省であるとともに、お弟子さん方にも、ちゃんとわかるように教えていられるのです。

是非しらず邪正もわかぬ

このみなり

小慈小悲もなければ

名利に人師をこのむなり

何が是で、何が非かもわからない。何が間違っているか、何が正しいかということもわからないこの身ではないか。私もそうだが、諸君もそうではなからうか。慈悲心、慈悲心というが、よくよく自分の心を省みると、常に我というものの方が先に立っていて、小慈悲もない。それにもかかわらず、とかく名誉と利益を好む。また、何が正しいか、何が間違っているのか、少しもわからないせに、人の師匠となることを好む。指導者になりたがる。おれについてこい、おれがお前を教えるという。自分には、少しも人を助けるような力もないし、そんな殊勝な心はひとかけらもない、それなのに、さもありそうな顔をして、わしがわかっているから教えてやろう、こういうことも好むと親鸞聖人はおおせになっています。

前述したように、親鸞聖人ご自身、人の師匠なんてあるべきではないことを痛烈にご反省になっています。それで、弟子にもその点をよくよく考えてみようではないかと、ご注意になったご和讃だと思います。

親鸞聖人は、心の底から凡夫意識であり、罪悪深重の意識を深く持っていられます。それで本願を信じ念佛をもう

すそのことに、ひとつも理窟をいわれない。そして自分は法然上人のおおせをこうむって、それが正しいかどうかは私にはわからない、とにかく法然上人がおっしゃるから、私はそのおおせをこうむって、ただ念佛もうすばかりだと、このように無条件の信心であり、理窟抜きのお念佛であります。これくらい純粹無垢なお念佛はないと思います。

とかく私たちは、それに理窟や道理をつけて、物知り顔に、念佛というのはこういう意味があるといったくなります。このごろの知識階級の方は、ただ自分の知識だけで批判して、もう念佛なんか要らないとまでおっしゃる方もいます。恐らくこの方は、念佛を称えた人がどのような心境にいられるかをあまりお考えになっていないのではありませんか。

念佛は、本当に念佛を称えた人が、初めて心のなかで、しかと信じさせていただき、ありがたくちょうだいし、そして喜びを感じているのです。そこには恩というもの、おのずから感じられてきます。そこには親鸞聖人が教えてくださったように、釈迦牟尼佛と阿弥陀如来の二尊の智慧と慈悲によることが、しみじみと思われてきます。

(協和発酵工業株式会社元社長・在家佛教協会前理事長)